

5

ぼんどうくりはしかんかい
「坂東 栗橋 感懐」に寄せて

土田耕太郎

男声合唱団コール・グランツ 2024年6月20日

男声合唱団コール・グランツ創立35周年コンサートで男声合唱曲「坂東栗橋感懐」を委嘱し、初演することになった。埼玉県久喜市の著名な作曲家下總皖一と作詞家高橋郁氏のコンビの曲と、盆踊りに流れる栗橋音頭が男声合唱曲になるのだ。

坂東とは言うまでもなく坂東太郎＝利根川のことで、ベースと一緒に歌っている田村邦光氏が企画し、その人脈の中で栗橋在住の作曲家中野ひとみ氏が素敵な「合唱とピアノのための民謡交響詩」に作曲・編曲してくれた。思えば、コール・グランツは鎌田弘子先生が栗橋の地に立ち上げ昨年35周年を迎えたが、創立当時も独立した現在も栗橋在住の団員は少数派である。現在12名の団員と指揮者、ピアニストの中で旧栗橋町民は5人しかいない。その中で生まれも育ちも栗橋というのは私だけであろう。栗橋にちなんだ曲をまさか自分たちで初演することになるとは考えてもいなかったが、それが現実になった今、栗橋の紹介がてら私の思いを綴ってみたい。

なおグランツを4年前に卒団した同じくベースの深津博氏のお誘いで俳句を始めたのだが、幾つかふるさと栗橋を題材に俳句を作っているのでその句に寄せるかたちで書いてみる。本来俳句は、解説などせずに読者に想像してもらい成り立つ十七音の詩であり、自分の俳句について書くのは種明かしをするようで興ざめだが本稿の趣旨に免じてお許しいただきたい。また北葛飾郡栗橋町は、4市町合併で現在は「久喜市」であるが、本稿ではタイトルにちなみ「栗橋」と呼ばせていただく。

わが影は土手の下まで初筑波

年が明けると利根川のほとりにある八坂神社に初詣に行く。栗橋旧市街の町民の多くがそうではないだろうか。因みに八坂神社は全国に2千近くあるそうだが、栗橋の人にとって八坂神社といえば1ヶ所しかない。早ければ大晦日の0時になると直ぐに、そうではなくとも初日の出を見がてら明け方に。多くの人はおせちを食べた後の昼頃からとなるので三が日の午後は大層混んでいる。参詣の列は参道を伸びて駐車場は一杯となる。

しかしながら我が家はいつものんびりと境内が空き始める夕方になる。お参りを終え近くの利根川の堤防に足を伸すと、夕日を背に私の影が利根川の河原の方に伸びている。そしてその影の先には筑波山がきれいに見えている。毎年のことである。

向かひ合ふ肉屋魚屋夏つばめ

栗橋旧市街は、昭和20年代から40年代まで町の規模以上に商店街が大層賑やかだった。魚屋も肉屋も八百屋も自転車屋も電気屋も駅に行くまで商店が続いていた。国鉄と東武線の交差する栗橋はちょっとした交通の要衝で、商店街の買い物客は栗橋町民に留まらず、大和村(現加須市)や茨城県古河市中田地区や五霞村からも来ていた。そんな活気のある光景が今も目に浮かんでくる。

現在は大型店の進出によりご多分にもれずシャッター街となったが、駅前の静御前の墓に隣接するクラッセ商店街には今も肉屋と魚屋が向かい合っている。

荒神輿端に飛び入る白き足袋

栗橋旧市街の一大イベントは「天王様」と呼ばれる夏祭だ。神輿は1863年に新調され、「関東三大神輿」と呼ばれるほどの大きなもので、栗橋町民の誇りでもある。しかし非常に重たいが故に誰でも担げるわけではなく、体型がスマートになった今は担ぎ手が不足気味だ。それでも「板東神輿会」という担ぎ手の有志の会が組織的に伝統を守っているほか、遠くの町から毎年応援に来てくれる人もいれば、勤めを終えて帰宅し途中から急いで参加する人もいる。また重い神輿なので、5分も担ぐと体力を消耗してしまい、相棒と阿吽の呼吸で交代するのだ。神輿渡御はコロナ禍で3年間に行われなかったが、令和5年から復活し、荒々しく揉まれる様は勇壮である。

ふるさとは貧しままや天の川

私の所属する句会は、会員十数名が匿名で俳句を4句ほど出し合い、作者が分らぬまま批評し採点し合うのだが、この句はある日の句会で指導者が特選にしてくれた句である。「作者のふるさは経済的には決して裕福ではないが、作者はそんなふるさが好きで、誇りに思っていることが伝わってくる」との評をいただいた。旧栗橋は合併し久喜市となって14年が経った。自分では久喜市民になったつもりでいるが、心の奥では栗橋町民から抜け出せないでいる。子どもの頃は満天の星空に天の川も見えたが、今は残念ながら幾つかの星が見えるだけだ。

土手 上り蜻蛉の国の人となる

利根川は流域面積日本一の大河で、太古より氾濫を繰り返してきた。昭和22年のキャサリーン台風の洪水では東京まで被害が及んだ。首都圏を洪水から護る国家事業として「スーパー堤防」を作る計画があったが、民主党政権の事業仕分けで「八ッ場ダム」とともに一旦中止となった。結局は「強化堤防」として改修されることになり、八ッ場ダムとともに令和3年の台風19号にぎりぎり間に合い完成し、大洪水を防いでくれた。



土手 上り蜻蛉の国の人となる
利根川の土手(埼玉県久喜市栗橋側)

強化堤防事業は第一期工事が完成した。堤防のスケールの大きさや、富士・筑波・浅間・榛名など名峰を一望できる眺望の良さから、私は密かにこの改修された堤防を「日本一の堤防」と名付けている。私の散歩コースは町内に色々あるが、なんといってもこの堤防散策コースが一番のお気に入りである。上流の渡良瀬遊水池^{わたらせ}も含めこの一体は様々な動植物の生息地である。秋ともなれば当然のことながら赤とんぼの乱舞となる。

冴ゆる夜の遷座の列は目を伏せて

1624年徳川幕府は全国53ヶ所の関所のひとつとして栗橋関所を設置し、同年、隣接した地に栗橋八坂神社は創建された。松尾芭蕉が江戸を出て幸手宿から栗橋宿の関所を渡ったのが1689年といわれている。創建から390年あまり、利根川の強化堤防への改修工事で幅が拡張されるのに伴い、堤防に隣接していた八坂神社



栗橋宿総鎮守 八坂神社 (遷座以前の姿)

は堤防の上への移設を余儀なくされた。神社を移設することは「遷座」と呼ばれる。因みに伊勢神宮だけは「遷宮」と呼ばれる。



遷座後の栗橋宿総鎮守 八坂神社

八坂神社の世話人である私はこの遷座に立ち会うことになった。令和元年12月の当日の夜となり、旧神社のご神体(紙状とのこと)は神主により取り出され新しい社に運ばれる、世話人達は列を造り提灯で足元を照らしながら、決してご神体を見てはいけないと顔を伏せながら神主のあとをついて参道を昇った。新しい社にご神体をお納めし無事に遷座が終わると、いつもは快活な神主が感極まって涙していた。雨の降るとても寒い夜であった。

栗橋宿総鎮守 八坂神社の由緒

埼玉久喜市にある八坂神社は、近隣の人々や船主、旅人達をお守りする神様として、さらに神社縁起にあるように鯉と亀との縁起から隆昌・健康長寿に後利益のある神様として、多くの人々に天王様と呼ばれ厚く信仰されてきた。招福除災の神様として多くの方が参拝に訪れる。御祭神は素戔鳴尊。

八坂神社は元々、元栗橋(猿島郡五霞村)に鎮座していたと伝わる。正確な創建年代は不詳。現在の場所への遷座は慶長年間(1596-1615)に利根川の大洪水に見舞われた為であると伝えられている。寛永年間(1624-1644)に栗橋宿が当地へ移転したことにより日光街道栗橋宿の総鎮守として崇敬されるようになった。栗橋町は、かつて江戸時代には日光街道の交通の要衝の地として徳川幕府により関所が設けられ、また江戸に至る利根川舟運の拠点として河港が整備され、船主や旅人で賑わった宿場町であり、商業・交通の中心地として発展してきた。

<バックナンバー>

2024年

- | | | | |
|-----------------------|-------|--|------|
| ❖No.4 | 5月27日 | 下總皖一と民謡を創った 詩人・高橋 郁 | 加藤良一 |
| ❖No.3 | 5月15日 | 地元愛溢れる新民謡 「音頭」は地域を作る | 加藤良一 |
| ❖No.2 | 4月10日 | 和声学の神様と言われた下總皖一の業績 | 加藤良一 |
| ❖No.1 | 4月2日 | 男声合唱団コール・グランツ創立35周年記念委嘱新作
合唱とピアノのための民謡交響詩「坂東栗橋感懐」 | 加藤良一 |



[Back](#)

[坂東栗橋感懐TOPへ](#)

[Home](#)

[HOME PAGEへ](#)